

た ($p < 0.0001$). 数え落としの補正後では, 安静時 CBF は約 3%, BVI は約 7% 過小評価された. Diamox 負荷時でも CBF は約 3%, BVI は約 5% 過小評価された. 本法は再現性良好で, 負荷検査に有用と考えられた.

5. ^{125}I -Iomazenil のラット脳内分布と結合阻害試験

松村 要 中島 弘道 竹田 寛
中川 毅 (三重大・放)
外山 宏 竹内 昭 古賀 佑彦
(藤田保衛大・放)

^{125}I -iomazenil をラットに静注後, 5, 10, 20, 30, 60, 120 分にて脳を摘出し, 各部位の集積率 (% dose/g) を求めた. 各部位にて平均集積率は 10 分でピークとなった後減少し, 120 分にて大脳皮質 (0.53) に高集積, 小脳 (0.30) に中等度集積, 線条体 (0.09), 橋 (0.07) の集積は低値を示し, ヒトでの脳内分布と同様の傾向であった. ^{125}I -iomazenil と flumazenil (1 mg/kg) の同時投与にて, 大脳皮質の集積は 22% に低下し, 本剤の特異的結合は総結合の 78% と高値であった. 一方, 線条体, 橋においても 86% の結合阻害が見られた. ^{125}I -iomazenil SPECT により平衡法を用いて受容体の定量を行うには投与方法, 非特異的結合部位等について検討する必要がある.

6. 部分てんかん患者における ^{125}I -Iomazenil の有用性について

市川 聡裕 隅屋 寿 辻 志郎
絹谷 啓子 利波 紀久 久田 欣一
(金沢大・核)
中村 充彦 地引 逸亀 (同・精神)

部分てんかん患者におけるイオマゼニールと HM-PAO との比較, 脳波焦点との部位の一致を比較検討した. ベンゾジアゼピン系薬物を服用していない部分てんかん患者 17 例を対象とした. 焦点部位は脳波所見により決定した. HM-PAO では 17 例中 10 例 (低集積 7 例) に局所異常を認めた. またイオマゼニールでは後期像で 12 例 (低集積 9 例) に局所異常を認めた. 脳波焦点とはイオマゼニールでは低集積を示した 9 例中 7 例 (77.8%), HM-PAO では 7 例中 5 例 (71.4%) で一致した. イオマゼニールはてんかん焦点

部位の決定に HM-PAO と同等かそれ以上の有用性を持つと考えられた.

7. 脳梗塞亜急性期の $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -ECD と $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO の比較検討——Super Dynamic SPECT と Static SPECT による病態評価——

外山 宏 竹下 元 柴田 香織
古賀 佑彦 (藤田保衛大・医・放)
前田 寿登 江尻 和隆 仙田 宏平
片田 和廣 竹内 昭
(同・衛生・診療放)
野村 昌代 (同・神内)
加藤 正基 横山喜美江 (同・放部)

脳梗塞亜急性期に, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -ECD と $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO の静注後早期ダイナミック SPECT (Dy) とスタティック SPECT (St) を行い, その所見との違いと, 脳内および体内動態と病態との関連について比較検討した. 対象は, 亜急性期脳梗塞 3 人である. 亜急性期早期の 1 人は ECD, HM-PAO ともに Dy で高血流, St で高集積となった. 亜急性期後期の 2 人は, Dy で ECD, HM-PAO は低～等血流であったが, St では, ECD で低集積, HM-PAO で高集積となり, 乖離した. HM-PAO は水溶性物質の蓄積, ECD は酵素活性の低下による保持能の低下が主な乖離の原因と考えられた.

8. 脳腫瘍への $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO 集積について

大口 学 西川 高広 東 光太郎
玉村 裕保 谷口 充 興村 哲郎
山本 達 (金沢医大・放)

脳腫瘍患者 15 人 (治療前 6 人, 治療後再発 9 人) に対し, 計 32 回の $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO SPECT を施行した. このうち 18 例では腫瘍およびその周囲が低集積を示したが, 14 例では集積増加を示した. この 14 例を MRI と比較したところ, 13 例で Gd で高信号域を示す領域に一致した. また 3 例では T1 強調像で腫瘍周囲の低信号域に一致した. 以上より, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO は腫瘍のみではなく腫瘍周囲にも集積することが示唆された. 腫瘍周囲への集積は, ほぼ同時期に施行され ^{201}Tl -SPECT の集積とは異なっており, 今後さらに比較検討を要すると思われた.